R.シュトラウス：ヴァイオリン・ソナタ

1887～88 年にかけて作曲されたシュトラウス唯一のヴァイオリン・ソナタは、交響詩《ドン・ファン》（1889）などで注目を浴びる以前に書かれた初期の作品。3 楽章からなり、第 1 楽章はソナタ形式。冒頭から溌剌とした若さがあふれ出し、ヴァイオリンの優美な旋律が伸びやかに歌う。第 2 楽章は三部形式で、「即興曲」と題されている。ロマンティックな旋律が主導的で、情熱的な中間部を経たのち、無類の美しさを秘めた静謐な時間が訪れる。ロンド形式の第 3 楽章「終曲」は、暗く沈んだピアノの前奏から、一気に高みへと駆け上がって朗々と甘美な旋律を奏で、華々しいフィナーレに至る。

ウェーベルン：ヴァイオリンとピアノのための 4 つの小品

ウェーベルンは 1904 年、シェーンベルクに師事し（それまでは独力で作曲を学んでいた）、作品 3 の《5 つの歌》（1909）以降は無調を用いるようになった。本曲は 1910 年に作曲された無調の作品。4 楽章からなるが、各楽章はそれぞれ 1～2 分と短い。この時期のウェーベルンの特徴である、作品の極端な短さ、（コル・レーニョなど）特殊奏法の使用、演奏者への念入りな指示、厳選されたわずかな音数による明晰なテクスチュアが見て取れる。聴く側にも集中力が求められる曲だが、凝縮された音空間に豊潤な広がりが感じられる。

コルンゴルト：《から騒ぎ》より 4 つの小品

恋にからんだ企みが錯綜するシェイクスピアの戯曲『から騒ぎ』上演のために作曲された劇音楽から 4 つの小品を選んでアレンジしたもので、1918～19 年頃の作。第 2 曲における警吏の「ヤマリンゴ（ドグベリー）」と村役人の「桃酒（ヴァージズ）」は、劇最大の誤解をとくのに大きな役割を果たす凸凹コンビだが、その個性的なキャラクターが巧みに描写されているほか、それぞれ印象的な場面が軽妙に表現されている。